酒折宮問答歌再考

犬飼和雄

1

現在わたしは酒折宮問答歌の論文をくりかえし書いているが、それは甲府に住むようになったからだ。といっても、五十年以前に甲府に来たとき、甲斐国のことは、山梨県のことは、全く知らなかった。もちろんいうまでもなく、酒折宮問答歌があるなどうわさにも聞いたこともなかった。

わたしが甲府へ来たのは、甲府にある大学山梨大学で英語を教えるためだった。そのため甲府で家を求めてくらすようになった。その家が、酒折宮と呼ばれていた神社の東隣りにあった。といっても酒折宮についてはなにも知らなかったし、なんの興味もなかった。

それでも大学への通勤に、神社の境内を利用するようになった。すると、神社の境内にある石碑の文字がいやでも目に入るようになった。やがて、この神社で、ヤマトタケルノミコトとミヒタキノオキナという人物が、はるか昔、歌で問答をかわしたのを知った。ふと、そんな文化的な歌問答が、どうして甲斐国かと、古代甲斐国にひきこまれていった。やがてわたしは東京の法政大学に移ったが、もうその頃は古代甲斐国にひかれ、甲府をはなれられなくなっていた。

ちょうどその頃、わたしは佳川文乃緒と知り会った。佳川はもの書きでもあるし、歌い手でもあった。同時に古い甲斐のことをおどろくほどよく知っており、やがてわたしを古い甲斐へ案内してくれるようになった。

赤烏銅鏡もその一つだった。

この銅鏡は三珠町という甲斐国の東南端の町にある古墳から出土したものである。二三八年に三国時代の呉の国でつくられたもので、赤烏元年という文字がきざまれていた。赤烏というのは太陽のことである。この鏡が甲斐国の古墳の中に入っていたということは、そんな古代、すでに甲斐国には文字がそれなりにわかり、この赤烏銅鏡を必要とした人物が、いや、国が存在したのであろう。

わたしの個人的意見を述べさせてもらえば、この赤烏銅鏡の存在が、どうして酒折宮問答歌が甲斐国かという疑問に答えてくれている気がした。

次の石碑は誰もどこから出土したか知らないが、盆地の東端に存在したことはまちがいない。星石と呼ばれている巨石である。しかし星とは関係がなく、その巨石の表面の右側に文字が二行八文字きざまれている。左側には太陽と月がきざまれている。その間に、点のような穴が十前後ほられている。この穴があるから星石といわれるようになったのであろう。しかし石碑の中心はあくまでも文字である。その文字の一行は「八百万神」となっている。これは『古事記』の文字である。この文字があるところを見ると、この石碑も甲斐国の古代のものかもしれない。

また現在は神社だが、その酒折宮の背後に小高い丘がある。その丘は御室山と呼ばれている。御室山とは甲斐国王の住居という意味だが、今では山頂へ登る道もない。

ヤブをかきわけて山頂にあがると、山頂にひとかかえもある巨石がある。その巨石に字が、「埤」という字がきざまれている。それ以外にも、それぞれヤブにうずもれているが、大きな石に、光とか境とかいう字がきざまれているし、これ以外にもたてに四文字がきざまれている石がある。しかしこの四文字は読むことができない。このように山の石に文字がきざまれるのを、他ではみたことがないが、いずれにしろ、これは古代甲斐人が文字を読むことのできた証拠であろう。

古代甲斐国にひかれ、あれこれ学びながら、甲斐国の塩山という町が古代甲斐国の存在と関係があるなど考えたこともなかった。関係があるとわかったのは、『甲斐国志』という本を手にとって読みはじめたときだった。この本は江戸時代に書かれた甲斐国の歴史書である。

この本の古蹟部というところに、塩山として説明がでていたのである。江戸時代に書かれたものだから、もちろん、現在の町の説明ではない。塩の山の説明であった。その『甲斐国志』には塩山を次のように書いてあった。

山ノ周回壹里高拾町鹵塩（ろえん）ヲ産ス。

わたしは長いこと日本には岩塩はないと信じていたが、この文はそうしたわたしの信念を裏切るものだった。鹵塩というのは岩塩のことである。この文は甲斐国の岩塩の説明である。その塩の山は周囲が一里で高さが十丁あるというのである。

これだけでは信じられないかもしれないが、梁塵秘抄に、梁塵秘抄というのは平安末期につくられた歌謡集で、もっぱら都で歌われたものだが、そこに「かひにをかしき山の名はしらねなみさきしほの山」のように、その塩の実在が暗に証明されている。

また平安時代都に甲斐の塩山が、和泉式部をはじめとしてなん人もに和歌でうたわれているし、八世紀に書かれた『先代旧事本紀』の甲斐の国造（くにのみやつこ）の名前が塩海足尼（しほみのすくね）と塩の字が入っていることでも、岩塩が甲斐国にあったことがわかろう。なお古代岩塩があるところに人間が集まり、そこに古代の文化をもったそれなりの国が存在したことは認められる。この件に関していえば、中国の前漢時代に『塩鉄論』が書かれている。それを見ると漢という古代の国がいかに塩に支えられていたかがわかるのである。

また、古代甲斐の国が存在した証としては、甲斐国から多く出土している精巧な縄文式土器がある。

それよりなにより、明らかに甲斐国に古代国家があったことを主張しているものとして大小の古墳がある。

ここから酒折宮問答歌にもどり、その論に入る前に、まず酒折宮問答歌の文について説明することにする。

酒折宮問答歌は『古事記』『日本書紀』に、同じ問答歌が書かれていると長いこと思いこんでいた。が、その問答歌は、実は現代の学者によって現代の日本語にやくされたものだったのである。もちろん、わたしが長いこと読んでいた『古事記』も『日本書紀』もそうだったのである。しかしこの両書を作ろうと思いたった天武天皇の時代は、六百年代は、この両書が完成した七一二年と七二〇年も、日本には文字はなかった。そのため『古事記』も『日本書紀』も中国文字の漢字で書くしかなかった。当然酒折宮問答歌も漢字で書かれたのである。しかもその漢字は三種類からなっていたのである。その一つは中国語、いわゆる漢文である。二つ目は、日本語を漢字音をつかってあらわしたものである。これはたとえば問答歌などの歌にもちいられたものである。三つ目は、『日本書紀』などが参考にした『芸文類聚』という百科事典の字と同じ意味に問答歌の意味を解さなければならないということである。

2

これから扱う酒折宮問答歌は『古事記』にも『日本書紀』にも記されている。しかも日本語版の『古事記』『日本書紀』では、この酒折宮問答歌が全く同じものになっている。どうして本が違うのに、この問答歌が同じなのかを、長いことおかしいとも思わなかった。それでもおかしいと思うようになったのは『古事記』と『日本書紀』という二つの作品があったからだ。したがって、この両書から説明をはじめることにする。

この両書は天武天皇の命令でつくられたものだが、完成したのは、『古事記』が七一二年、『日本書紀』が七二〇年である。天武天皇が亡くなったのは六八六年だから、天皇の死後この二作は作られたのである。

しかし七二〇年になっても、日本にはまだ日本文字がなかったので、『古事記』も『日本書紀』もすべて漢字で書かれたのである。

はじめて『古事記』や『日本書紀』を手にとって読んだ時、わたしはそういうことを知らなかった。ましてこの両書の特徴など知るよしもなかった。日本語版を読むだけでいっぱいだった。それでもやがて、この両書の特徴は、天武天皇の壬申の乱というものがわかればわかるし、酒折宮問答歌がわかる、ということがわかってきた。天武天皇がどうして日本の歴史を作ろうとしたかという理由までわかる気がした。

ただなにがわかろうと、その目的はここでは、酒折宮問答歌をわかるためである。

さて、天武天皇は天皇になる前は大海人皇子といい、天智天皇の皇太子だったといわれている。しかし天智天皇はやがて大友皇子という皇子を太子にする。すると大海人皇子は身の危険を感じ、僧になって吉野宮に逃れる。

やがて天智天皇が死ぬと、大友皇太子は大海人皇子が生きていては、安全に天皇になれないと思い、大海人皇子のもとに兵を送る。大友皇太子にとって、大海人皇子はそれほど危険な存在だったのである。その事実を裏付けるように、大海人皇子はやがて反抗に転じ、両者の間に激しい戦いがおこる。

この戦いを壬申の乱という。

戦いの結果は、大海人皇子が大友皇子を殺して天皇に、天武天皇になる。したがって大友皇子は皇太子だったので、天智天皇の正式の後継者だったので、天皇になった天武天皇は天皇位を横奪したことになる。それ故に、壬申の乱で戦っている時、いわゆる天皇はまだ存在しなかったのである。強いて天皇と呼べる人物がいるとすれば、それは大友皇子である。

さてわたしは『日本書紀』の壬申の乱を読んでいたが、するとその壬申の乱の記録の中に「天皇が」ということばがいくつもでてきたのである。最初、当然のようにこの天皇は皇太子の大友皇子かと思った。それはすぐにまちがいだと気がついた。この天皇は、大海人皇子だったのである。

『日本書紀』は天武天皇の命令で作られた歴史書だという証が、こんな天皇に見られるのかと、その時妙に納得した。

ここまでくると、天武天皇がどのように考えて、日本の歴史を作ろうとしたか、それなりにわかる文が残っているのに気がつく。

その文というのは、太安万侶の書いた『古事記』の序文である。そこに天武天皇のことばとして次のように語られているのである。

是(ここ)に天皇詔(の)りたまひしく、「朕聞く、諸家
のもたる帝紀及び本辞、既に誠実に違(たが)い、
多く虚偽を加ふと。今の時に当りて、其の
失(あやまり)を改めずば、未だ幾年をも経ずして其の
旨(むね)滅びなむとす。斯(こ)れ乃ち、邦家の経緯、
王化の鴻基(こうき)なり。故惟(かれこ)れ、帝紀を選録し、
旧辞を討覈(とうかく)して、僞(いつは)りを削り実(まこと)を定めて、
後葉(のちのよ)に流(つた)へむと欲(おも)ふ。」とのりたまひき。

この天皇というのは天武天皇のことであり、壬申の乱で、天智天皇の皇太子を殺して天皇になった天武天皇のことばだとわかると、それなりにこの序文はわかるであろう。

いちおうわたしなりの理解をのべることにする。

たとえば「既に正実に違い、多く虚偽を加う」という天武天皇のことばは、壬申の乱によって、大友皇子を殺して天皇になった天武天皇の立場からの主張であろう。また「帝紀を撰録し、旧辞を討覈(とうかく)して、偽(いつは)りを削り実(まこと)を定めて」というのは、皇太子を殺して天皇になって、天武天皇が自分の新天皇としての正統性を述べているのである。このことばは全体として見ると、天武天皇が自分こそ正統な天皇だという、大和天皇家の歴史を作れと述べていると思われる。

さてこれは『古事記』の序文について述べたのであるが、その『古事記』は実は長いことその存在が黙殺されていたのである。もちろん黙殺したのは、天武天皇を中心とした大和天皇一族である。『古事記』が長い間どうして黙殺されたかといえば、暗に倭国の存在を認め、倭建命のように、日本を代表する英雄の名前に倭をつかったからであろう。『日本書紀』では、倭を日本にかえ、倭建命を日本武尊にかえているのでもそれがわかる。それよりなにより、『古事記』の存在が認められなかったのは、『古事記』には壬申の乱を含め、天武天皇のことが書かれていなかったからだと、わたしは考えている。

3

さてここから酒折宮問答歌に入るが、それに先立って、今までわたしがどのように酒折宮問答歌を考えて論じてきたかを説明しなければならないだろう。

従来のわたしのこの問答歌論の最大の欠点は、問答歌といっても、その問答歌は、岩波書店の日本古典文学大系の『古事記』と『日本書紀』の日本語訳の問答歌を中心におこなってきたことである。この日本語訳が原文に忠実な訳だと思いこんだことにもよるが、そんなことはいいわけにすぎない。

なおこの両書には原文がそえられていたが、どうせ漢字、見てもわからないと、長いこと思いこんでいた。それに原文をそえているというのは訳が原文に忠実だと、その学者が信じていたからだろうとわたしは解していた。

それはともかく、酒折宮問答歌をこの両書がどのように説明し、それが一般的な理解になっており、それをわたしも同意し、やがておかしいと、どのように反論していったかをまず述べることにする。わたしは長いこと、普通に酒折宮問答歌といわれているものは、わたしの場合『古事記』によるもので、それによると、景行天皇の時、その皇子のヤマトタケルノミコト＝倭建命が、天皇の命令で東征し、甲斐国の酒折宮で、ミヒタキノオキナ＝御火焼之老人という人物と歌で問答をかわしたというものである。

その問答というのは、倭建命が御火焼之老人に、新治、筑波から酒折宮までいく日かかったかとたずね、その質問に、御火焼之老人が、九泊十日ですと答えたというのである。

その同じ問答歌が『日本書紀』にものっているのである。わたしは最初『古事記』の問答歌を知った時、『日本書紀』にも同じ問答歌が書かれているとは知らなかった。といって知った時、ああ、そうかと思っただけだった。

もっともここで述べている酒折宮問答歌というのは、現代の学者によって日本語にされたものである。

それを書くと、次のようになる。

即ち其の国より越えて、甲斐(かひ)に出でまして、
酒折宮(さかおりのみや)に坐(ま)しし時、歌(うた)ひたまひしく、
　新治(にいはり)　筑波(つくば)を過ぎて　幾夜(いくよ)か寝(ね)つる
とうたひたまひき。爾に其の御火焼(みひたき)の老人(おきな)、

御歌に続ぎて歌曰ひしく、

かがなべて　夜には九夜　日には十日を

とうたひき。是を以ちて其の老人を誉めて、

即ち東の国造を給ひき。

この文の主人公は、ヤマトタケルノミコト＝倭建命で、其の国というのは、足柄の坂本である。足柄の坂本は甲斐の国の南にあるので、倭建命が甲斐国に入ったのは南からである。

それはともかく、『古事記』のこの文を読んで新治をはじめわからないことだらけだった。さいわいなことにいくつも註がついていた。その一つが新治についてのものだった。それが次のようなものだった。

常陸国新治郡新治郷と筑波郡筑波郷で、

常陸の新治や筑波の地を通り過ぎて……

この註を見て、わたしはあっけにとられた。というのは、わたしが今まで見たこともない、もちろん『古事記』でだが、常陸国という国が註の中にあり、そんなわたしにとって未知の国の中に新治という地名が郡や郷となって入り込んでいたからだ。それだけではなかった。時間をかけてわかったことだが、この註では新治と筑波が同じ場所になっているのである。それどころか、原文の漢字に新治なる地名はないのである。そんな存在しない、というより、新治なる地名をつくった学者が自分のつくった地名にこんな註をつけていたとは。

もう一つ、わたしがあっけにとられた註をのべることにする。この註も最初はそうかと納得し、やがてそのおかしさに気づいたのである。

この註は御火焼之老人についてのものである。

夜のともしびのために火をたく役の老人。

書紀には秉燭者とある。

この註を見た時、わたしはわかったようなわからないようなそんな気分だったが、ああそうかと思った。が、しばらくして、この註はなんだと思った。少なくとも、ヤマトタケルノミコトは、景行天皇の皇子で、東征軍の將軍である。その將軍が甲斐国にいるというのは、甲斐国を征服したということである。その征服者がいるところは、酒折宮である。宮というところは、王の居住地である。そんな人物とそんなところて、歌で対等に会話する人間が、ただの火をたく役の老人であるはずがない。それが書紀では秉燭者とある。この註ではますますわからない。この註では、御火焼之老人がどうして秉燭者になったのかわからないからである。いや、このような註では、御火焼之老人・秉燭者そのものもわからない。

『古事記』の酒折宮問答歌の日本語訳の註を見るかぎり、わたしはただただあっけにとられるだけだった。

次の文は『日本書紀』の酒折宮問答歌の文であるが、酒折宮問答歌に関するかぎり、どちらも全く同じである。ここでいう問答歌というのは、現代の学者によって日本語にされたものである。それがいかに矛盾したものであるかを中心に説明することにするが、その前提として、まず『日本書紀』のその日本語訳の酒折宮問答歌を述べることにする。

常陸を歴て、甲斐国に至りて、酒折宮に居

します。時に挙燭して進食す。是の夜、歌

を以て侍者に問ひて曰はく、
新治　筑波を過ぎて、幾夜か寝つる
諸の侍者、え答へ言さず。時に秉燭者有り。
王の歌の末に続けて、歌して曰はく、
日日並べて、夜には九夜　日には十日を
即ち秉燭人の聰を美めたまひて、敦く賞す。
則ち是の宮に居しまして、靫部を以て大伴
連の遠祖武曰に賜ふ。

この文を見てまず気づくのは、この酒折宮問答歌が、『古事記』の酒折宮問答歌と同じになっていることである。本文では、『古事記』のヤマトタケルノミコトは足柄之坂本、つまり南から甲斐へ入っている。それに対して『日本書紀』では常陸を歴て甲斐に、つまり北から入っている。したがってこの問答歌を旅の日数とするためには出発点が二か所ではなく一か所でなくてはならない。したがって『古事記』の註もあのような註だったし、『日本書紀』の註も次のような不自然なものになっているのである。

新治・筑波は、常陸国の地名、新治郡は今、
茨城県眞壁郡の東部、筑波郡は同筑波郡の大部分。

こんな土地名の註に納得する人はいるだろうか。この歌はヤマトタケルノミコトの時代、景行天皇の東征の話である。新治、筑波が常陸国の地名という註などただただあっけにとられるだけである。それよりなにより、新治と筑波が同じ所だというような説明は納得しかねるものだ。

もう一つの註は、秉燭者についてのものだが、この註を書いた学者に、註はなにかと聞きたくなった。秉燭者の註として次のようにかいているのである。

記には「御火焼之老人」とある。

これでは『日本書紀』がどうして御火焼之老人を秉燭者にかえたのか全くわからないし、秉燭者とは何者かもわからない。

それ以外にも、この二つの酒折宮問答歌にかかわる説明文にはおかしなことだらけである。その一つが、答えた人物の結末である。読めばわかるが、『古事記』では老人は東の国造になっているのである。それに対して、『日本書紀』では武日に賜ふになっているのである。もちろん、この変化についても註など全くない。

さて次の章で、『古事記』と『日本書紀』を酒折宮問答歌に関する点に限ってのみ、その違いを論ずることにする。

3

わたしは長いこと、ヤマトタケルノミコトという名は、『古事記』では倭建命であり、『日本書紀』では日本武尊だと、当然のごとく理解し、書いてきた。

ところが、最近になってその知ったかぶりに首をかしげるようになった。

わたしのその知ったかぶりを支えていたのは、岩波書店の日本古典文学大系のそれも日本語版の『古事記』や『日本書紀』のヤマトタケルノミコトの説明がそうなっていたからである。もっともどの出版社の

『古事記』『日本書紀』での説明も、岩波のと同じ説明になっている。

ところがいつ頃か、わたしの頭の中に、このヤマトタケルノミコトの説明はあやしいぞ、納得できないぞと疑問が浮かんできた。ヤマトタケルノミコトのヤマトというのは国名で、たしかこの国をつくったのは、神武天皇だ。神武天皇が九州から東征し、奈良を征服し、そこに新たな国をつくった。その国がヤマトで、『古事記』では、といっても、この『古事記』は原文の『古事記』だが、ヤマトは夜麻登になっているのである。

したがって、『古事記』この『古事記』は原文でも日本語版でも同じだが、そこに書かれている倭建命は現在ではすべてヤマトタケルノミコトと読まれている。倭の字はすべてヤマトと読まれているのである。

現代語版の『古事記』では、倭はすべてヤマトである。『古事記』ではその冒頭の神話のところに、もちろんそこには神武天皇は存在しないが、伊邪邦岐命と伊邪邦美命の大八島誕生の神話の中に、一つの島として、大倭豊秋津島が誕生したと書かれている。この倭の字が『古事記』における倭の字の最初である。現代語版の『古事記』ではこの倭からすべての倭をヤマトと読んでいる。もちろんこの神話の時代、ヤマトなる国は存在していないのだ。

さらにいえば、神武天皇の九州での名が、神倭伊波礼毘古命である。現代語版の『古事記』ではこの倭もヤマトと読んでいる。これもおかしい。それに『古事記』のどこにも倭をヤマトと読めなど書いていないのである。

なおいえば、『古事記』や『日本書紀』が書かれた六百年から七百年頃、当時の日本の学者たちの頭の中には、倭は日本の唯一の古代国家として生きていたにちがいない。

その証として、ここで倭国がどこでどのように存在していたかを説明することにしよう。

日本の古代史は、『古事記』『日本書紀』が書かれる以前は、もっぱら中国の史書の中で倭国として描かれていた。その代表的な史書をあげると『三国志』がある。そこでは倭国のことが、魏志倭人伝としてかなり詳細にえがかれている。倭の女王卑彌呼のことを語っているのもここである。この『三国志』は二百年代に書かれたものだから、そこに書かれた倭国は二百年代前後と考えられる。

この他倭国の歴史をのせるものは十におよぶが、もう一つあげると『宋書』がある。この『宋書』の特徴は、倭の五王について具体的に述べていることである。例えば武王のことを、使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓・六国諸軍事・安東大將軍・倭王に除す。というような記事が見える。

また朝鮮半島では、古代の日本倭国の行動の記録が残されている。その一つが広開土王碑文というものである。広開土王碑というのは高さが六メートルの方形の巨岩で、そこに当時の朝鮮半島の歴史が刻まれ、その一部に倭のことがかかれているのである。時代は四百年前後である。史書としては、『三国史記』がある。この史書は千年前後につくられたものだが、倭国に関する最初の記事はその新羅本紀の倭人兵を行ねて、辺を犯さんと欲すの前五〇年の記事である。倭の女王卑弥乎の記録も見える。また百済本紀では倭国が百済とくんで、唐と新羅の連合軍と戦い大敗した記事が書かれている。これは六六三年の白村江の戦いである。

このように当時の、というのは六百年代前後の日本の学者の頭の中には倭国が存在し、その一つの中心が倭建命であったと思われる。したがってもちろん、この倭はヤマトとは読まれてはいなかった。おそらく『古事記』が長いこと認められなかったことに、この倭の字があったことであろう。

それは『日本書紀』を見ればよくわかるのである。そのひとつが「ヤマト」ということばである。ヤマトの天皇家は「ヤマト」を前面におしだしたかったのである。倭では「ヤマト」を前面におしだすことはできないと考えたのである。

そこで『古事記』の大倭豊秋津島を『日本書紀』は大日本豊秋津州と書きかえて、日本に次のような漢字ルビをつけたのである。この漢字ルビを見れば、『古事記』の倭がヤマトではないことがわかるであろう。

日本という字の漢字ルビは次のようになっているのである。

日本・此を耶麻騰と云ふ。下皆此に效え。

この文を訳すと、「日本これをヤマトとする。これ以後ヤマトという時は、すべて日本とする。」

したがって、『日本書紀』の日本武尊はヤマトタケルノミコトである。なお『古事記』の倭建命はワタケルミコトである。それは次の漢字ルビが証明している。この漢字ルビはもちろん原文のものである。したがって『古事記』の倭の字をどう読んだらいいのかを明示したものである。それが少宮ということばにつけられた漢字ルビだ。少宮というのは、伊奘諾尊の住居の名前につけられたものである。仍りて日の少宮に留り宅みましきという。

少宮・此を倭柯美野といふ。

この漢字ルビ倭柯美野はワカミヤである。おそらくこの漢字ルビが問題なのは、倭の字だったのであろう。倭の字は発音は「ワ」以外考えられないのである。それにこれは伊奘諾尊に関する話である。もちろん神話である。そこでの倭の発音である。なお『古事記』の原文ではヤマトは「夜麻登」になっている。したがって、どう考えても、『古事記』の倭は「ヤマト」ではありえない。

4

ここでは酒折宮問答歌が『古事記』と『日本書紀』のその日本語版でどのように論じられているかを明らかにすることにする。というのは、『古事記』や『日本書紀』はほとんどの日本人が現在ではその日本語版で読んでいるからである。わたしも長いことこの両書が漢字で書かれたものだとは知らなかったのである。

さてわたしがここで扱うのは、岩波書店の日本古典文学大系の『古事記』と『日本書紀』の酒折宮問答歌のそれも日本語版である。この文は現在日本でたいへん信頼されており、他社の『古事記』や『日本書紀』もほとんど岩波にならっている。いちばんの例は倭を「ヤマト」と読んでいることでわかる。

まず岩波の『古事記』の酒折宮問答歌は次のようにはじまるが、その主人公は倭建命でヤマトタケルノミコトと読まれている。

即ち其の国より越えて、甲斐に出でまし
て、酒折宮に坐しし時、歌日ひたまひしく、
新治　筑波を過ぎて　幾夜か寝つる
とうたひたまひき。爾に其の御火焼の老
人、御歌に続きて歌日ひしく
かがなべて　夜には九夜　日には十日を
とうたひき。是を以ちて其の老人を誉め

て、即ち東の国造を給ひき。

この文の其の国というのは足柄の坂本であり、足柄の坂本は甲斐国の南である。したがって倭建命が甲斐国へ入ったのは、南からである。また国造というのは、古代においては国王に相当する。

なお『古事記』の酒折宮問答歌と『日本書紀』の酒折宮問答歌がこのように問題になるのは、この歌が二つの史書に記されていたからで、どちらか一つの史書にしるされていなかったら、このようなわたしの論文にはならなかったであろう。それはともかく、『日本書紀』の酒折宮問答歌は次のようになっている。『古事記』の酒折宮問答歌と比較して読むと、その違いとか、矛盾とかいくつも問題点に気づくである。もちろんこの文も日本語版のものである。

常陸を歴て、甲斐国に至りて、酒折宮に
居します。時に挙燭して進食す。是の夜、
歌を以て侍者に問ひて曰はく、
新治　筑波を過ぎて、幾夜か寝つる
諸の侍者、え答へ言さず。時に秉燭者有
り。王の歌の末に続けて、歌して曰はく、
日日並べて、夜には九夜　日には十日を
即ち秉燭人の聰を美めたまひて、敦く賞
す。則ち是の宮に居しまして、靫部を以
て大伴連の遠祖武日に賜ふ。

わたしはこの二つの酒折宮問答歌を最初に読んだ時、おかしいと思わなかったどころか、同じ歌だと思いこんだ。今になれば同じこと自体がおかしいのだが、長いことそんなことには気づかなかった。

わたしにとって、この二つの酒折宮問答歌が、同じものでありながら実は同じものではない、だから『古事記』だけではなく『日本書紀』に書かれたのだとわかるまでには、長い時間がかかったし、『芸文類聚』という中国の唐代の百科事典との出合が必要だった。

それはともかく、この『古事記』と『日本書紀』の酒折宮問答歌の現代語訳は今でも世の中にごくふつうに通用しているが、実はなんともおかしいのである。そうしたおかしさが通用している日本の文化そのものがおかしいといった方がいいのかもしれない。

そのおかしさの最初は、ヤマトタケルノミコトである。『古事記』ではヤマトタケルノミコトは倭建命になっている。これに誰も疑問を投げかけないようである。

ところが『日本書紀』の作者は倭建命がヤマトタケルノミコトではないと、漢字ルビで否定しているのである。『日本書紀』では冒頭の漢字ルビで「ヤマト」という時はすべて「日本」にせよと記している。なおこの漢字ルビは前に記してある。なお倭の字音についても、倭の字音は「ワ」であると、漢字ルビで前に説明した。

『日本書紀』ではヤマトタケルノミコトは日本武尊である。ところが今更いうまでもないことだが、日本語訳では倭建命もヤマトタケルノミコトになっている。もちろん『古事記』のどこにも倭をヤマトに読めなど書いてない。

更にいえば、このヤマトタケルノミコトの相手役の名もちがうのである。いや名だけではなく、人間そ

のものがちがうのである。

『古事記』ではその相手役は、御火焼之老人である。この人物は、その返事がよかったといって、東の国造にされているのである。国造というのは、古代において国王である。

わたしが御火焼之老人を甲斐国王と考えるのは、まずヤマトタケルノミコトと歌で対等にことばをかわしたことである。ヤマトタケルノミコトは景行天皇の皇子で、東征軍の將軍である。そんな人物と対等に、しかも歌でやりとりのできる甲斐人は、甲斐国王以外には考えられない。しかもその場所が酒折宮である。宮というのは国王の住居である。

したがって『古事記』がその存在を長いこと認められなかった原因は、このように倭の存在を、甲斐国の存在に認めたところにあったと思われる。

そのことは『日本書紀』の酒折宮問答歌だけを見ただけでも十分にわかるのである。『古事記』の倭を日本にかえ、この日本をヤマトと現天皇家の国名にかえたことでまずわかる。それからヤマトタケルノミコトの相手を秉燭者としたことも同じである。秉燭者にはどう考えても倭の存在は認められない。このことばの意味は、灯を手にもって散歩するものである。

なお『古事記』ではこの酒折宮問答歌の結論は、老人を東国造にして終っており、甲斐国の存在をうかがわせるが、『日本書紀』では次のようになっている。

この宮に居しまして、輙部を以て大伴連の遠祖武日に賜う。ここではここの説明を見て、そこに甲斐国の存在をうかがうことはできないであろう。少なくとも、『日本書紀』では、ヤマト天皇家以外の王国をすべて否定しているのだ。

最後にこの二つの酒折宮問答歌の違いを述べると、『古事記』ではヤマトタケルノミコトは足柄の坂本から甲斐の酒折宮に入っている。足柄の坂本は甲斐国の南である。したがってヤマトタケルノミコトは、甲斐国へ南から入っているのである。

ところが『日本書紀』ではヤマトタケルノミコトは常陸から甲斐国の酒折宮へ入っているのである。常陸は甲斐国の北である。したがってヤマトタケルノミコトは、明らかに北から甲斐国の酒折宮へ入っているのである。

なぜこんな違いになったかは、もう一つ問題ではあるが、それはそれとして、ここで問題にしたいのは、『古事記』の酒折宮問答歌と『日本書紀』の問答歌が、もちろん現代語訳でだが、全く同じだということである。

まず『古事記』の問答歌をあげると、次のようになっている。

新治　筑波を過ぎて、幾夜か寝つる
かがなべて、夜には九夜　日には十日を

それにたいして、『日本書紀』では問答歌は次のようになっている。

新治　筑波を過ぎて、幾夜か寝つる
日日並べて、夜には九夜　日には十日を

見ればわかるとおり、『古事記』の酒折宮問答歌と、『日本書紀』の酒折宮問答歌とはおなじである。こんなことってあるのだろうか。

それだけではない。元来註というのは、理解できない原語につけるものだ。訳語などに註はつけないの

である。ところが新治に、もちろん、原文に新治などという地名はないが、次のような註がついている。これは『古事記』の註である。新治についてである。

常陸(ときわ)国新治郡新治郷と筑波郡筑波
郷で、常陸の新治や筑波を通り過ぎて

この註は常陸が中心になっているが、常陸という地名は、『日本書紀』を読んでいない人間には全くわからないのである。『日本書紀』にでてくる地名だからである。また新治郡新治郷とか筑波郡筑波郷なる国名も全く不可解である。また御火焼之老人の註に書紀には秉燭者とあるにいたっては註とはなにかときたくなる。

『古事記』も『日本書紀』もこの問答歌を筑波から酒折宮までいく日かかったかと、ヤマトタケルノミコトがたずねたのに、『古事記』では御火焼之老人が九夜十日ですと答え、『日本書紀』では秉燭者が九夜十日だと答えたとなっている。

これもおかしい。たずねたのは、ヤマトタケルノミコトである。ヤマトタケルノミコトは天皇の皇子で、東征軍の將軍である。その將軍が甲斐の酒折宮へ入ったというのは、甲斐国を征服したということである。そんな將軍が、筑波から酒折宮までいく日かかったかたずねたりするだろうか。百歩ゆずって、旅の日数をきいたとして、南から酒折宮へ入ったヤマトタケルノミコトと北から酒折宮に入ったヤマトタケルノミコトが同じ九夜十日だとはありえない。それ以上におかしいのは、『日本書紀』の九夜十日という返事は二度目である。こんな返事を二度もするとは、とうてい考えられない。ありうることではない。

ここまではどうにか考えたが、長いことここでとどまり、ここから先へは一歩もすすめなくなった。

5

『日本書紀』といっても、もちろん、岩波版のものだが、わたしはその解説文を読んでいた。するとそこに中国の古典の影響を受けて『日本書紀』がいかにつくられたかと書いてあった。もちろん、『古事記』や『日本書紀』が書かれた時代、七百年代、日本には日本語が、この日本語というのは、ひらがなやかたかなのことだが、まだなかったので、文はすべて漢字で書かれていた。したがって、想像以上に中国古典の影響が強かったのはいうまでもない。もっともその漢字は二種類あって、その中心は中国文の漢字だが、もう一つは、日本語を漢字音で表現したものである。これは日本の歌や人名、地名がすべてそうである。

『日本書紀』がいちばん影響をうけた中国古典は『芸文類聚』だと書いてあり、その『芸文類聚』について、かなりくわしい説明が書いてあった。わたしが『芸文類聚』を知ったのはこの時がはじめてだった。もっともそんな古典が身近にあっても、当時のわたしには中国語を読むなどとうていできなかったので、手にとることもしなかったろう。

それはともかく、その解説文は異常なほど『芸文類聚』をくわしく説明していた。

書紀の編者がその潤色のために大いに利用したのは、まず唐人欧陽詢らの撰した『芸文類聚』百巻があげられる

(高祖の武徳七年六二四奏上。)… この書はいわゆる

「類書」の一つであって、これには、書名の示す如く、

天部以下災異部にわたって類聚した唐以前の代表的佳句

佳文の芸文(詞華)が殆んどすべて収集されている。『芸

文類聚』は、たとえ百巻の大巻の大部に及ぶにしても、

編者らにはその利用のための便宜が与えられていた。…

当時、書紀の編者は、この一大類書を参照して書紀を述

作したという事実は認めざるをえない。

ここでいう類書というのは、現代の百科事典のことであり、書紀というのは『日本書紀』のことである。ここでは書紀の編者の利用となっているが、『古事記』の編者も利用できたはずである。ということは、宮中に図書館があり、そこにこのような中国古典がそなわっていたはずだからである。

この書紀の『芸文類聚』の紹介はそれなりに勉強になったが、『芸文類聚』を具体的にどのように利用したか、つまり『芸文類聚』とはどのようなものか紹介されてなかったので、わたしはここでは特にひかれなかった。したがって。その類書を手にとりたいとも思はなかった。

それでも中国の漢字を少しは勉強しないと酒折宮問答歌がいきずまったままに終ってしまう、ひとつこの行き詰りから抜け出すために中国へ漢字の勉強に行くかと考えた。

その未、中国の成都の四川大学へ客員教授として留学できた。成都の町はわたしにとって魅力的だった。中国の古典が意外なほど容易に手に入った。『芸文類聚』の四冊本も手に入ったのである。でも当時わたしは中国語を全く読むことができなかったのでその作品をあけて見ることもしなかった。先の『芸文類聚』の解説で百巻と書いてあったが、当時はすべて手書で、巻物だったので百巻だったのである。

わたしは成都で勉強するどころか楽しんでしまった。というのは、写真でしかみたことのない中国骨董が、たとえば青銅器とか唐三彩とか各種の陶器や土器が、しかもわたしが買える値段でわたしの前に出現したからだ。それだけではなく、山水画や美人画が町にあふれ、それも自由に手に入ったからだ。わたしはろくな勉強もできず成都から日本に帰ってきた。それでもさすがに漢字の勉強をはじめた。といってそれが勉強といえるかどうか。いつ頃かわたしは李白や杜甫や白居易の詩が好きになりめったやたらと読みはじめた。もちろんそんな時、漢字の勉強をしているなどという意識は全くなかった。が、それが勉強になっていたのであろう。

いずれにしろ、わたしが目にするのは漢字だけになった。

6

最近になって、わたしは白居易の長詩長恨歌や琵琶行をそらんじられるほど読めるようになった。少しは中国語がわかるかもしれないと、ようやくに『芸文類聚』を手にとった。

すると冒頭の巻一天部天項から思いがけない文がとびこんできた。とっさにそれがどこにあった文か気がつかなかったが、すぐに思い出した。なるほどこういうことだったのかとわたしはひとりうなづいた。

わたしは『日本書紀』、それは日本語版だが、読むごとに、いつもこの文はなんだとひっかかるとこがあった。それは次の文である。

古(いにしえ)に天地(あめのちいま)未だ剖(わか)れず、陰陽(め)分(をわか)れざりしと

き渾沌(まろか)れたること鶏子(とりのこ)の如(ごと)くして…

もちろんこの文は『日本書紀』の冒頭の天地創造の文で、わたしがこの文のどこにひかかったかといえば、鶏子ということばである。鶏子というのは、ニワトリのタマゴのことである。ニワトリのタマゴが白味と黄味が一つになっているので、天と地が分れていないで一つになっている比喩にたとえたのだが、そこにニワトリのタマゴをもってくるとは、あまりにもとうとつだと思われたのである。

それが『芸文類聚』に次の二つの文があった。

（1）天如雞子。

（2）天地混沌如雞子。

どちらの文も天と地が創世期にはまだ分れてなく、ニワトリのタマゴのように一体になっていると述べているのである。ということは、『日本書紀』が創成期をニワトリの卵にたとえたのは『芸文類聚』によったことだとわかったのである。だからといって、酒折宮問答歌が『芸文類聚』とかかわりがあるとは思わなかったが、その中に十日ということばを見いだした時、この十日は酒折宮問答歌の十日かもしれないぞと考えはじめた。この『芸文類聚』の十日というのは、旅の十日ではなく、十の太陽であり、羿の弓で射ち落された九の太陽は九烏であり、当時というのは中国古代の堯帝にそむいた九つの国でもあった。

この記事は『芸文類聚』の中にまず次のように記されている。なお『芸文類聚』は当時の類書、百科事典で、当時の中国や日本の学者たちにそれなりに信頼されていたと思われる。

大荒之中暘谷上有扶桑十日所九日居下。

この文の大荒というのは、中国の東に広がる大海原のことである。太陽がそこからあがるので、太陽の住居がそこにあると古代の中国人は考え、暘谷としたのである。また太陽の住居なので、その谷に扶桑という神木がはえていると考えたのである。問題は「十日所浴九日居下」である。

わたしはこの文を見た時、古代の中国人は、そして古代の日本人も、といっても古代の中国人の学者と日本人の学者という意味だが、それなりにみごとに太陽について考えたものだと感心した。

十日所浴というのは、十の太陽が浴する、体を冷すところという意味である。太陽が火の玉に見えたからであろう。太陽がもえつきないのは、十あって、まい日体を冷しては交代で空に火の玉になってかがやくことができたからだと考えたのだ。

昼をこのように考えていた古代中国人は夜をどのように考えていたのだろう。わたしはその夜を次のことばだと気がついたのである。おそらく『古事記』の作者も『日本書紀』の作者も夜を次のように理解したにちがいない。

日中有三足烏。

これはそのまま日本語にすると、太陽の中に三本足のカラスがいるという意味である。ということは夜とは、三本足のカラスが太陽の住人になることだと考えたのである。

次の『芸文類聚』の文は『淮南子』の引用文である。『淮南子』というのは前漢時代につくられた思想史で、当時の、というのは前漢時代からの古代中国人という意味だが、そこに書かれたことを、現実だと信じていた。

『芸文類聚』の作者もそう信じていたし、『古事記』『日本書紀』の作者たちもそう信じていた。その『淮南子』の文を眞実だと引用したのが次の『芸文類聚』の文である。なお『淮南子』をつくったのは劉安という人物である。

堯時十日並出草木燋枯堯命羿仰射十日中其九烏皆死墮羽翼。

この文をそのまま訳すると次のようになる。

堯皇帝の時、空に十の太陽が同時に出現した。熱くて草木が焼け枯れた。そこで堯皇帝は弓の名人である羿に九つの太陽を射落してこいと命じた。羿は太陽にむかって矢をはなち、十の太陽のうち九この太陽を射落した。この文では射落した九つの太陽を九烏と書いているが、太陽の中の三本足の烏は、また夜のことである。

さてこの話は太陽のことではなくもう一つ別の話しにとれるのである。この堯という人物は、堯舜と並び称される古代中国の二人の聖帝の一人である。聖帝といわれるのは、中国を平和に統一支配したという

ことである。ここに堯が出現したのは、そういうことをした皇帝だということである。もっといえば、中国を平和に統一支配したということである。つまり中国に十の太陽が出現して草木を焦枯したというのは、住みにくくなったということは、九つの国が反乱したので、皇帝堯が弓の名人羿に、ということはすぐれた武力を行使してその九つの国を平定したということである。

当時は、というのは『芸文類聚』が書かれた当時はということだが、当時の中国人は、ここでは当時の学者たちはといった方がよいかもしれないが、そして、その『芸文類聚』を読んだ当時の日本人の学者たちも、この話を征服譚と理解したのであろう。少なくとも、旅行譚などとらなかったはずである。またそんな旅行譚を当時必要としなかったはずである。

ここでは酒折宮問答歌がどのように『芸文類聚』の影響を受けているかの説明として、次のような説明をしているのである。

その一例として、『芸文類聚』の第十一の帝王部一に天皇氏が記されている。その天皇氏はかんたんなものだが、天皇という『古事記』『日本書紀』の称号はここからきているのではないかとわたしは思っている。

それよりなにより、『古事記』『日本書紀』は神話の部分をのぞき、すべて天皇を中心に歴史がしるされている。中国を代表する『史記』や『三国志』などにはこのような皇帝を中心とした記述はみられない。ところが『芸文類聚』では歴史を帝王を中心にかいているのである。『古事記』『日本書紀』がこの『芸文類聚』の帝王部と同じ書き方をしているのは明らかである。いずれにしろ、酒折宮問答歌が陽に陰に『芸文類聚』の影響をうけてつくられたということができるであろう。

7

ここから酒折宮問答歌そのものを扱うことにするが、わたしは長いこと酒折宮問答歌とは、岩波書店の日本古典文学大系の『古事記』『日本書紀』に日本語で書かれている酒折宮問答歌が酒折宮問答歌そのものだと信じて論文を書いてきた。そうではないと気がついて、わたしのそれまで酒折宮問答歌について書いた論文がすべてだめだと気づいたのはつい最近のことだった。現在酒折宮問答歌再考というテーマでその論文を書きなおしている。そのわたしのミスをおぎなうためである。

それなら酒折宮問答歌は、『古事記』『日本書紀』は何語で書かれたかといえば、漢字で書かれたのである。しかもその漢字は二種類からなっている。三種類ともいえるのである。

その漢字の中心となるのは、いわゆる中国語そのものである。その説明文は中国語で書かれている。それに対して歌の部分は、日本語なので、日本語を漢音を利用して表現しているのである。例えば「ヤマト」という日本語を「夜麻登」とするがごとくである。またもう一つの漢字の用法は日本独自の漢字のよみ方、たとえば、「アズマ」を東の漢字で読むことである。

このように『古事記』『日本書紀』は、ということは、酒折宮問答歌はといえるが、このような三種類の漢字で書かれているのである。それを長いこと日本語で書かれていたと信じ、その日本語の酒折宮問答歌がおかしいとろんじてきたのだからいやはやである。

さてそのわたしがふりまわされていた日本語の酒折宮問答歌をあらためてここに記して、私の論をはじめることにする。

その酒折宮問答歌の日本語版は、同じものが『古事記』と『日本書紀』の両方に記されているのである。

『古事記』では次のようになっている。

新治（にひはり）　筑波（つくば）を過（す）ぎて、幾夜（いくよ）か寝（ね）つる

かがなべて、夜には九夜　日には十日を

この歌は、質問したのは、ヤマトタケルノミコト、『古事記』ではヤマトタケルノミコトを倭建命と書いている。それに対して答えたのはミヒタキノオキナ、『古事記』では御火焼之老人となっている。

この『古事記』の酒折宮問答歌に対して、『日本書紀』の日本語の酒折宮問答歌は次のようになっている。

新治　筑波を過ぎて、幾夜か寝つる
日日並べて、夜には九夜　日には十日を

この歌は質問者はヤマトタケルノミコトであるが、『日本書紀』ではヤマトタケルノミコトを日本武尊と記しているのである。それに対して答者は、ヒトモセルモノ、秉燭者になっている。

このたずぬる人と答える人を見ただけでも、『古事記』の酒折宮問答歌と『日本書紀』の酒折宮問答歌が同一だというのはおかしいのに、ヤマトタケルノミコトが『古事記』では南から酒折宮に入っているのに、『日本書紀』では北から入っているのである。それがどちらも同じ旅の歌だということなどありえないのである。

それどころか、酒折宮問答歌にはもっとおかしいことがある。それは註についてである。註というのは、原則として原文につくものである。訳語につくものではないし、まして、関係のない他の語を指示するものでもない。実は酒折宮問答歌にはそのような註にもならない註がいくつもあるのである。

この例を一つだけあげておく。それは『日本書紀』の秉燭者の註である。

秉燭者の註は次のようになっている。

記には「御火焼之老人」とある。この秉燭者にはどこを見ても老人などいう文字はない。この註が註になっていないのは今更述べるまでもないであろう。どこにも秉燭者の説明がないのだ。

それよりなにより、『古事記』のヤマトタケルノミコトが現在では倭建命だとされているが、原典というのは、すべて漢字で書かれたものだが、原典に書かれている倭建命をヤマトタケルノミコトなど読めとは、原典の『古事記』にはどこにも指示されていないのである。

8

ともかくここで原典にもどったので、ここで『古事記』の酒折宮問答歌の原典にもどることにする。

次の質問を発したのは、『古事記』では倭建命であり、答えたのは御火焼之老人である。この二人の関係は、征服者と被征服者である。征服のために旅をして歩いて甲斐国に来たのは倭建命である。それをむかえて答えたのが御火焼之老人である。この二人の会見がどこでおこなわれたかといえば、酒折宮である。住居に「宮」がつけば、この当時は王宮である。そういうことをすべて頭に入れて、次の原典の酒折宮問答歌を見ていただきたい。なお次の文は七一二年に書かれたものである。

即自其国越出甲斐、坐酒折宮之時、歌曰、
邇比婆理都久波袁須疑弖
伊久用加泥都流
爾其御火焼之老人、続御歌以歌曰、
迦賀那倍弖　用邇波許許能用

比邇波登袁加袁

是以誉二其老人一、即給二東国造一也。

ここでは『日本書紀』の酒折宮問答歌と比較しながら酒折宮問答歌を追求したいのだが、その前に、『古事記』の一つの特徴を説明しておく。それは前の文の其国ということばである。其国というのは足柄之坂本のことで、この国は甲斐国の南である。したがって『古事記』の倭建命は甲斐国の南から甲斐国に入ったことになる。

それに対して、『日本書紀』の酒折宮問答歌は次のようになっている。

歴二常陸一至二甲斐国一居二于酒折宮一時挙レ燭而進食。是夜、以レ歌之問二侍者一曰

珥比麼利　菟玖波塢須擬氐

異玖用伽禰菟流

諸侍者不二能答言一時有二秉燭者一続二王歌之末一

而歌曰

伽餓奈倍氐　用珥波虚虚能用

比珥波苔塢伽塢

『古事記』の其国に対し、『日本書紀』では歴常陸となっている。常陸は明らかに甲斐国の北にあり、ヤマトタケルノミコトは北から甲斐国に入ったことになる。おそらく『古事記』の甲斐国への南入説がまちがっていたので、『日本書紀』は北入説にかえたのであろう。

それはともかく、岩波書店の『古事記』『日本書紀』の酒折宮問答歌をはじめとして他の出版社の酒折宮問答歌もすべてがということだが、現在では、岩波の『古事記』と『日本書紀』のと同じものになっている。もちろん、この酒折宮問答歌というのは現代の学者に現代語に訳された酒折宮問答歌のことである。一般にはその方が読まれているのである。

さてここで、『古事記』と『日本書紀』のちがいをあらためて述べたい。そのちがいの中心はヤマトに見られる。現在の日本語にされた『古事記』『日本書紀』では倭も日本もすべてヤマトになっているが、原典ではそうはなっていないのである。

岩波の『古事記』では大八島誕生という神話の中で、その一つの島の誕生名として、大倭豊秋津島とし、この倭をヤマトと読んでいる。この倭の字をヤマトと読めなど『古事記』のどこにも書いていない。現代の日本の学者たちはそれを無視して、それどころか、『日本書紀』では倭の読み方を指示してあるのに、それさえ無視して、倭をヤマトと読んでいるのである。

このヤマトという国名は、『日本書紀』がつくられるまで、その書き方は一定してなかった。『古事記』ではヤマトを夜麻登と書き、『日本書紀』ではヤマトを夜摩苔と書いたりしていた。もちろん両書とも原文でである。

ところが『日本書紀』では、この『日本書紀』は原文だが、その『日本書紀』の冒頭の大八洲国誕生の一つの国の名前として大日本豊秋津洲(しま)がある。『古事記』では大倭豊秋津島になっている。

ところが『日本書紀』ではこの大日本豊秋津洲(しま)に読み方のルビ、漢字ルビが次のようについているのである。もちろん原文である。

大日本・日本、此云二耶麻騰一下皆放レ此。

この文を現代語に訳すると次のようになる。

日本、此の語をヤマトという。いかヤマト

という場合はすべて日本とする。

いずれにしろ、『古事記』の倭についてはこのようなヤマトの読み方はない。それどころか、『日本書紀』に倭の読み方が漢字ルビとして記されているのである。

それが次の文である。

仍留二宅於日之少宮一矣。少宮、此云二倭柯美野一

この文を訳すと、「仍(よ)りて日の少宮(わかみや)に留(とどま)り宅(す)みましきという。」少宮に住んだのは伊奘諾尊(いざなきのみこと)であるが、今はそんなことは問題ではない。問題なのは少宮の漢字ルビである。それは倭柯美野＝ワカミヤとなっていることである。倭とうい字をワと読めと指示していることである。

『古事記』と『日本書紀』はほとんど同時代に、ということは漢字で書かれた作品である。その漢字の読み方は両書とも同じだと考えるべきである。倭という『古事記』の字も「ワ」以外には考えられないのである。

このように『古事記』と『日本書紀』は異なっているのである。このような視点から『古事記』の酒折宮問答歌と『日本書紀』の酒折宮問答歌を見ると、二つの点に気がつくのである。

その一つは、この二つには共通の字が共通の場所におかれているということである。それ以外の字は場所は同じだが、字は全く異なるということである。このことからでも、この二つの問答歌は同じではないとわかるのである。もちろん、これは原歌のことであり、この原歌を現代語の訳では全く同じにしていることは、またそれが現代国語では一般化されているのである。

さてくりかえしになるが、その二つの原歌をもう一度あげることにする。

『古事記』の酒折宮問答歌の原歌は次のようになっている。

邇比婆理　都久波袁須疑弖

伊久用加泥都流

迦賀那倍弖　用邇波許許能用

比邇波登袁加袁

これに対して『日本書紀』の問答歌の原歌は次のとおりである。

珥比麼利　菟玖波塢須擬氐

異玖用伽禰菟流

伽餓奈倍氐　用珥波虚虚能用

比珥波苔塢伽塢

この二つの歌を読みくらべると、同じ字が、比と用という字が、同じ位置にあるのがわかる。したがって、同じ内容の歌だとわかる。しかし、それ以外は同じ位置に異なる字がおかれている。その代表的な例は、『古事記』の場合は許許、『日本書紀』の場合は虚虚である。また「を」の場合は、『古事記』の場合は袁になっているのに、『日本書紀』では塢となっている。どうして「を」の字に烏をつかったかは別として、この二つの歌の関係は、『古事記』の酒折宮問答歌では不満だったので、『日本書紀』の作者が、その酒折宮問答歌に、つまり元の酒折宮問答歌の内容はそのまま、『日本書紀』の内容にふさわしいものにつくりかえたものだとわたしは考えたのである。少なくとも、現在のように一般化している『古事記』と『日本書紀』の酒折宮問答歌のように全く同一のものではないのはたしかである。

ここから、その具体例に入ることにする。

両歌に共通の文字というのは「比」と「用」である。『古事記』では次のようになっている。

（1）　邇比婆理

（2）　比邇波登袁加袁

この比という字は、日を太陽をあらわす字である。したがって、邇比婆理は新治のような地名にはなりえないのである。

『日本書紀』ではこの部分は次のようになっている。

（1）　珥比麼利

（2）　比珥波苔塢伽塢

あきらかに比にまつわる字が『古事記』と『日本書紀』では異なる。それはともかく、この比の字は、日の太陽の意味である。したがって、ここでも珥比麼利は新治な地名ではないのである。（2）の意味は「日には、太陽は十をである。」もちろん、『古事記』も『日本書紀』もである。

もう一つ共通の文字がある。それは「用」である。『古事記』では次のようになっている。

（1）　伊久用加泥都流

（2）　用邇波許許能用

この用という字は、夜という意味である。したがって、（2）の意味は、夜にはここの夜である。

これが『日本書紀』では次のようになっている。

（1）　異玖用伽禰菟流

（2）　用珥波虚虚能用

この（2）は『古事記』の（2）と意味は同じで、夜にはここの夜だが、字は異なる。

この時代、というのは、まだ日本の文字がなかった時代、字を、漢字をかりるということは、現代人の漢字感では考えられないほど大きな意味があった。その意味は『古事記』と『日本書紀』の漢字の違いによるもの、この時代の漢字の意味の違い、というより、この時代の字がどのように使われていたかを知らなければならないということである。ことに酒折宮問答歌ではその点が問題になる。くりかえしになるが、ここでその問題をもう一度論じることにする。

酒折宮問答歌は日と夜が中心になっているが、日と夜をあつかっているのは、中国の古典、『芸文類聚』である。『古事記』『日本書紀』がこの『芸文類聚』の影響を強く受けており、酒折宮問答歌はこの『芸文類聚』の次の部分を、日と夜の部分に準じて作られたのだとわたしは信じている。

『芸文類聚』では夜を次のように述べている。

日中有三足烏

これは、日の中に、太陽の中に、三本足のカラスがおり、夜になるということは、その三本足のカラスが日の、太陽の住人になると考えたのである。

これに対して次の文は日と夜を表現していると同時に、日と夜を人格化した文になっている。

堯時十日並出草木焦枯堯命羿仰射十日中其九烏皆死隋羽翼。

わたしが酒折宮問答歌のもとがこの文だとわかったのは、この十日である。いうまでもなく、『古事記』『日本書紀』の漢字は、十日は、『芸文類聚』のこの十日だからである。これが旅の日数の十日でないことは、あらためていうまでもないだろう。

堯というのは堯舜とならび称せらる古代中国の理想的な聖帝である。このような聖帝というのは、国を平和に治めた人物である。

その皇帝の時に、十日が、十の太陽が一度に天にあらわれ、草木が焼け死んだ。そこで堯帝が弓の名人羿に命じて九つの太陽を射ち落とさせたという話だが、同時にこの話は、皇帝堯の時、九つの国が反乱した。そこで皇帝堯は弓の名人羿に命じて、というのは武力をつかって、九つの反乱国を平定させた。その平定された国をここでは九烏としたのである。ということは、太陽が死んで九つのカラス、つまり、夜になったということでもある。

さらにいえば、十日が、十の太陽が、九烏になって、皇帝堯の国だけが残ったということである。したがって、十日九烏というのは、十日九夜で、ここからわかってくることは、中国の皇帝堯が中国を平和な国として一つにまとめたということである。

さて、ここから酒折宮問答歌にもどることにしよう。いまさらいうまでもないことだが、この酒折宮問答歌は原文、漢字のものである。

『古事記』ではその歌の冒頭の字は次のようになっている。

邇比婆理

『日本書紀』では次のようになっている。

珥比麼利

あきらかに字をかえている。ところが日本語訳ではなぜ字をかえたのかなど全く考えないで、それどころか比という字がどんな意味をもっているのかもわからずに、『古事記』でも『日本書紀』でも邇比婆理と珥比麼利を同じ新治としかも地域名にしてしまっているのである。前にも述べたように、出発点が二つある旅の日数をたずねる歌などないのである。したがって、邇比婆理と珥比麼利は地域名の新治にはならない。その理由は、比の字が、日、つまり太陽だからである。

『古事記』の邇比婆理は「新日はり」つまり新しい太陽がかがやくである。もっと日本語にすれば、大和天皇家があらたに征服したという意味である。

その『古事記』に対して『日本書紀』の珥比麼利は『古事記』と同じ意味だが、字が異なるのである。珥という字は、字そのものが日を、太陽をあらわしているし、麼利はまるいで、この字そのものが日を太陽を示しているのである。つまり『古事記』の邇比婆理では、字を見ただけではそれが日、つまり太陽だとはわからないので、字を見ただけで。珥比麼利を見ただけで、それが日を、太陽を述べているのだとわかるようにかえたのである。

このように、日本文字がなく、すべて漢字でものを書かなければならなかった時代、当時の学者たち、『古事記』や『日本書紀』を書いた学者たちが、漢字にどのような思いをこめていたかは、この邇比婆理を珥比麼利になおしたなかにも認められるであろう。

次の文は（1）が古事記で（2）が『日本書紀』である。

（1）　都久波袁須疑弖

（2）　菟玖波塢須擬氏

この二つの文を見ると、「つ」の字のところが、『古事記』では「都」になっており、『日本書紀』では「菟」の字になっている。この字の変更は、酒折宮問答歌の中で、どうして字をかえるのかという理由を説明するのがもっとも容易だとわたしには思われるのである。

『古事記』のこの歌をつくった作者は、甲斐国の酒折宮でこの問答歌がかわされた。ということは、酒折宮というのは王宮である。王宮にいるのは王であり、王の住んでいるところは都である。だから筑波のつに都という字を使い、この地にかつて国が、王国があったことを暗示したのだ。

それに対して『日本書紀』では都を菟にかえたのである。菟はウサギという意味だが、わざわざくさかんむりのついだウサギという字にしたのだ。筑波という地が、草でおおわれている田舎だ、都ではないといいたかったのであろう。あらためていうことではないが、都も菟も発音は「つ」である。

この文では、もう一字目をひかれるところがある。それは「を」の字である。『古事記』ではをの字に「袁」の字をつかっている。この字は特になにかを暗示しているわけではない。

ところが『日本書紀』ではをの字に「塢」の字をあてているのである。もちろん、『古事記』のをの字「袁」をかえているのである。

おそらく『日本書紀』が塢の字にかえたのは、この酒折宮問答歌が『芸文類聚』の九烏の話、この九烏というのは、羿によって射ち落された九つの太陽が九烏になって死んだという話、この話はまた中国の古代の皇帝堯が中国を統一し平和にした話でもあるが、その九烏の話にもとづいているからなのである。烏はまた夜とむすびついているのである。

さて次の文は、（1）が『古事記』で（2）が『日本書紀』である。

（1）伊久用加泥都流

（2）異玖用伽禰菟流

この原文を「幾夜か寝つる」と日本語版の『古事記』も『日本書紀』も全く同じ日本語に訳し、その訳が現代では一般化している。しかしこの質問を発しているのは、ヤマトタケルノミコトである。ヤマトタケルノミコトが自分の足で筑波から酒折宮までいったのである。そんな人物がいく日かかってこの宮に着いたのかなど聞くだろうか。しかもヤマトタケルノミコトはこの国、甲斐国の征服者だ。そんな人物がこのような質問をすることはまったくありえない。

まして『古事記』と『日本書紀』の原文を見ると字がちがうのである。この字のちがいを理解すれば、酒折宮問答歌がどんな歌かわかるはずである。

この文はいわゆる「用」を夜を述べた文である。しかも『芸文類聚』の夜を述べているのである。『芸文類聚』の夜というのは、太陽であり、烏であり、国である。『芸文類聚』によると、皇帝の命により、弓の名人羿が天にあらわれた十日を、十の太陽をねらいそのうち、九つの太陽を射ち落した。その落ちた九つの太陽を、『芸文類聚』では九烏と書いている。なお『芸文類聚』では太陽の中に三本足の烏がいて、夜になるということは、その烏が太陽の中の主になることだと考えたのである。

したがって『日本書紀』で異玖用と用に、夜に、異という字をもちいたのは、この用が夜が、『芸文類聚』の夜であって、普通の夜ではないということを示しているのだ。

ということは、この用は、この夜は、ヤマトタケルノミコトが征服した国の数を聞いているのだ。それが『日本書紀』の異玖用伽である。もちろん、『古事記』の伊久用加も同じ意味である。

次に『古事記』では泥になっており、『日本書紀』ではその泥を禰にかえている。現代の日本語訳ではその泥も禰も寝にしてしまっている。泥と禰が寝と同じ意味だということはありえないのである。

ただ泥と禰は字音が同じなのである。どちらも字音は「ナイ」と「デイ」である。おそらく泥では意味が悪いので『日本書紀』では禰にかえたのであろう。泥ではその意味は泥でしかないが、禰は意味が「みたま」であり、言外に亡ぶものという意味がふくまれているからである。したがって、禰菟流はナイズルだが、言外に亡びた国がいくつかあったのか聞いていることがわかるのである。

これに対する答えは（1）が『古事記』で（2）が『日本書紀』である。

（1）迦賀那倍弖

（2）　伽餓奈倍氏

現代の日本語訳の『古事記』ではこれをかがなべてとしており、『日本書紀』では日日並べてとしている。どちらも日数を重ねての意にしている。ところが原文では『古事記』の賀を『日本書紀』では餓にかえている。もちろん、字音はどちらもガだが、意味は異なるのである。賀はよろこぶだが、餓はうえである。

したがって字をかえるということは意味がかわるのである。しかも酒折宮問答歌の日は『芸文類聚』の日である。日日並べてといえば、十の太陽が並んで空でかがやき、熱くて餓えて死んでしまう。だから『日本書紀』は賀を餓にしたのである。いいかえれば、『日本書紀』は『古事記』の賀を餓にかえることにより、そこの賀が『芸文類聚』の十日の話だということを明らかにしたのである。もちろん、この十日というのは十の太陽である。

次の『古事記』と『日本書紀』の原詩は、わたしがはじめて、その漢字の違いに気がついたものである。今更ことわることもないが、（1）が『古事記』であり、（2）が『日本書紀』である。

（1）　用邇波許許能用

（2）　用珥波虚虚能用

まず気がつくのは九を『古事記』では許許にし、『日本書紀』では虚虚にしていることである。『古事記』や『日本書紀』が参考にした『芸文類聚』というまでもなく、中国の古典ではすでに数字はごく普通に使われている。それを九という数字を許許とか虚虚とかわざわざ字で表現した酒折宮問答歌は、それだけでもこの問答歌をつくった作者の意図が字にこめられているのがわかるであろう。

『古事記』の九（ここ）、許許は『芸文類聚』の九烏によるものである。この九烏は夜を示すと同時に、皇帝堯に亡ぼされた九の国を示している。したがって、許許能用といえば、九の夜であり、ヤマトタケルノミコトに、大和天皇家に亡ぼされた九つの国ということになる。しかも『古事記』ではその征服の方法は、その相手の敵を抹殺するのではなく、敵の存在を認め、間接的に支配しているのである。それが次の酒折宮問答歌の結末である。

その老人をほめて、即ち東の国造を給ひき。

この老人はヤマトタケルノミコトに答えた御火焼之老人のことで、ヤマトタケルノミコトに降伏したので、甲斐国の東の国の王にしたということである。原文の許許（ゆるすゆるす）は暗にその事実を述べているのである。ということは、『古事記』では他国の存在をそれなりに認めているのである。

それに対して、『日本書紀』は大和天皇家以外の国の存在を認めないのである。その一例が「日本」をヤマトと呼べ、以下ヤマトという時はすべて日本にせよという規則を『日本書紀』の前提にしていることでもわかる。したがって『古事記』の他国の存在を認めているような許許は認められなかった。

それで許許を虚虚になおしたのである。虚という字は無という字である。したがって、虚虚能用といえば、抹殺された夜となる。この夜は『芸文類聚』の九烏、羿の弓で射ち落された九烏のことである。この九烏は亡ぼされた九つの国でもある。それが虚虚能用、九（ここ）の亡ぼされた夜である。この夜は九烏、九夜である。

さて次の二つの文は酒折宮問答歌の最後の文句である。（1）が『古事記』（2）が『日本書紀』である。

（1）　比邇波登袁加袁

（2）　比珥波苔塢伽塢

ここで目につくのは「を」の字のちがいである。『古事記』では「を」の字が「袁」になっているが『日

本書紀』ではその「を」を「塢」にかえているのである。この変更はなんだろう。少なくとも袁という字に特別な意味はない。それに対して『日本書紀』の塢の字には意味を感ずるのである。というのは、そこに烏がいるからである。烏がいるということは、前にも述べたが、そこに『芸文類聚』の烏が、九烏が存在しているということである。九烏が存在しているということは、十日が存在しているということである。今更十日と九烏の関係を述べる要はないだろうが、九烏は夜でもあるのだ。夜は大和天皇家に反抗した国でもあるのだ。原文では烏に土へんがついているが、この土へんは国をあらわしている。したがって、塢という字は、大和天皇家に反逆した国をあらわす字ともとれるのである。

つまり原文は塢という字で、酒折宮問答歌がどのような問答歌であるのかしめくくったのである。

少なくとも酒折宮問答歌は旅の日数をたずねるという歌ではなかった。その歌は大和天皇家が日本を統一支配したと天皇家がどんなにすばらしか、その威大さを誇示した歌だったのである。

さいごに『古事記』と『日本書紀』の酒折宮問答歌の原歌をわたしなりに日本語にして終えることにしよう。

にひはる（新らし天皇家がかがやく）筑
波をすぎて　いく夜かないする
（いく国かないする）
かがなへて（国をかぞえると）
夜にはここの夜（支配した国は九つ）
十の国のうち

参　考

古事記　岩波日本古典文学大系
日本書紀　岩波日本古典文学大系
芸文類聚
甲斐国史（上、中、下）
塩鉄論
三国志
広開土王碑文
宋書
三国史記